
東方雷帝録

夜々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雷帝録

【Nコード】

N4501Z

【作者名】

夜々

【あらすじ】

神話の時代を生き抜いた大妖怪。彼は自らを封印した。

永い時が流れ、現代。幻想郷と呼ばれる小さな箱庭にてその封印が解ける。

はたして彼は幻想郷にどんな変化をもたらすのか。

プロローグ

幻想郷。そこは人や妖怪などの人外が共存する小さな箱庭であり、理想郷である。60年周期の大結界異変も落ち着きをみせ、そこに住まう人々はのんびりとした生活を取り戻しつつあった。

そんなある晴れた日のこと。

神話の時代から存在するも、幻想郷の中でさえ忘れ去られ、もはや知る人などほとんどいない大岩があった。その存在を知る数少ない人にも、それはなんの変哲もないただの岩だと認識されていた。事実その岩からはなんの力も感じなく、例え結界や封印のスペシヤリストたるスキマ妖怪や博麗の巫女が見たところで、なんら気にすることはないだろう。

しかしその日、なんとということもないはずの大岩と、それを基点とした封印が砕け散ったことで、幻想郷には確かに変化が生じたのだった。

それに気付いたのは今までに起きた異変にも何かしら関わりのあった、人妖はびこる幻想郷でさえ大きな力をもつと言える者達であった。

突如今まで感じたことのない力が幻想郷全土に広がったことを感じた。

幻想郷は決して大きな土地とは言えないが、それでも数多の生物

の住まう場所。

そこに力を満たすなど尋常なことではない。

そんな異常事態に対して彼女らのとつた行動は、傍観。また誰かが何かやらかしたのかと思いつつも気にせず。

幻想郷の住人は皆大なり小なりのんきなのであった。

第01話

その日起きた事態を最も正確に理解したのは鬼の四天王たる伊吹萃香であった。

彼女は己の体を霧散させ、幻想郷中を漂っていた。そこになんの変哲もない大岩が砕け、そこから尋常ならざる力が溢れ出てくるのを感じた彼女は、強者を求める鬼の本能に従って感じた力の近くに姿を現した。

はたしてそこにいたのは男の妖怪だった。身長は175cmほどだろうか。長くも短くもない男性として平均的な長さの黒髪に、シンプルな衣服。清潔感のある精悍な顔付きで、十二分に整っていると言えるだろう。

しかし鬼たる彼女が意識を奪われたのはその体から滲み出る圧倒的なまでの力。

本来他から一線をかくす力を持つ鬼。その中でなお四天王と呼ばれる彼女ですらはかり知れぬほどの力がその男から感じられる。並の妖怪では感じとることすら出来ないだろう。どうして蟻が地球のすべてを知覚出来るだろうか。大妖怪たる自分だからこそわかるこの男の強さ。

そして彼女がそれを感じて思ったことは

(闘いたい…!!…!)

かつてこれほどまでに興奮したことがあっただろうか。生まれた時から強い力を有していた彼女にとって、生まれて初めて遭遇した自分より圧倒的に強い存在。

八雲紫や西行寺幽々子など、自分と匹敵するであろう者達ならい

る。

しかしそんな幻想郷の名だたる大物がまるで赤子のように感じるその力。自分と相對してきた人間もこのような力の差を感じていたのだろうか、と頭の隅で考えつつ。全く勝てる見込みがないにもかかわらず、いや、だからこそ、闘いと思った。

そこで男が此方を見て、口を開く。知らず身構える彼女に対し、男は

「よお、はじめましてだな。不躰で申し訳ないんだが、色々と質問に答えちゃくれないか。」

思わず落胆する彼女はしかし、男には闘う理由など何一つなく、自分が勝手に闘うつつもりになっていただけという事に気付き苦笑する。臨戦体勢である自分の方がおかしいのだ。それを自覚しつつもこのままでは興奮の収まらぬ彼女は答える。

「私と闘ってくれないか。私に勝つことが出来たなら、何だって教えてやるよ。」

もちろん勝敗にかかわらず質問に答えるぐらいしてやっても良いのだが、せっかくの強者だ。手を抜かれてもつまらない。ただ全力で闘いたかったが故の返答。

それに対し男は溜め息をつく。

「鬼つてやつはこれだから…ま、体感時間はともかく、体の方はしばらく動かしてなかったわけだし、丁度いいか。」

…いいぜ。相手になってやる」

「じゃあ行くよー！」

返答を聞き歓喜を隠しきれず、彼女は闘いの始まりを宣言しつつ
一気に距離を詰める。

瞬きする間に接近するも男の顔に驚きはなく、彼女の拳は冷静に
いなされる。

己の拳が簡単にいなされたことに驚きつつもそれを表情に出すこ
ともなく、次々と攻撃を仕掛ける萃香。拳打や蹴り、のみならず柔
術や合気をも組み合わせ、まさに「技の萃香」の面目躍如。しかし
そんな攻撃を繰り返しつつも、それが届く事はない。鬼の膂力を当
然のように受けつつも男の顔には余裕すら感じられる。

攻める。攻める。攻める。しかし男には届かない。そのまま一分
ほど経っただろうか。男は準備運動は終わりだとしても言うかのように
次第に速さを増していった。

入れ替わる攻守。初めて男が拳を繰り出した。萃香はそれを受け
ようとするも受けきれず吹き飛ばされる。彼女は愕然とする。男は
妖力などまるで込めていないにもかかわらず、純粹な膂力で鬼たる
彼女を上回っていた。長きを生きてきたと自負する彼女ですら初め
て、かつ想定外の事態。鬼に膂力で勝る生き物など誰が想像すると
いうのか。

しかし彼女もさるもの。驚きなど後回しにして即座に立ち上がる。
防御はしたしそれほどダメージはない。

「ミッシングパワー!!!」

巨大化する萃香。まさか奥の手をこんなに早く使うことになる
は。しかしこれならば力で劣ることなどあるまい。

そこでふと右の肩に何かが触れる。彼女がそちらを見るとそこ
は自分を吹き飛ばした男がいて、足が目前に迫っていた。

再び吹き飛ばされる萃香。しかし今度は防御など出来なかった上に、威力は先ほどよりも更に増していた。激しく周囲のものに薙ぎ倒し、ようやく勢いが止まったとき、彼女の体はボロボロで、サイズも元に戻り、もはや動く事が出来なかった。

「…俺の勝ちでいいかい？」

こちらに近付きつつ男は問う。

「…ああ。私の完敗だよ。まさか…この私が一撃でやられるなんてね……」

たった一分ほどの闘い、それも完敗だというのに、彼女は不思議な満足感を得ていた。彼は八雲紫のように強力な能力を使ったわけではない。身体能力と体術のみで己を圧倒してみせた。その事実、彼女は久しく感じた事のなかった更なる高みへの渴望を感じた。

(体が治ったら一から鍛え直してみるか……)

彼女のそんな思いを知らず、男は若干気まずげに言う。

「あー…悪かったな。ちょっとやりすぎちゃったか。言い訳になるが、あんたが思ったより強かったもんで加減なんてせずに全力で蹴っちゃった。生憎俺に医療の心得はねえし、医者んとこまで連れてってやるよ」

一方的に勝負を持ち掛けたのはこちらだと言うのに、聞きたかったという質問もせずにそんな事を言いだすとは、妖怪のくせにお人好しだな。いや、仮にも自分は女の子だと言うのにおもいきり顔

を蹴飛ばすような奴をお人好しと言っていていいものか？いやいや、闘いの中で男も女も…と益体のない事を考え始めた自分に気がつき、思考を振り払う。

自分は控えめに言っても大妖怪だ。今こそ動けないが、この程度の傷なら一日で治るだろう。しかし逆に言えば一日の間は動けない。さすがに野ざらしで夜を明かすのはゴメンだった。

それに彼の質問に答えるにもキチンと治療してもらってからの方がいいだろう。さらに言えばこんな強者との縁をここで終わらせたくなかった。だから

「ああ…悪いけどお願いするよ…」

と、一先ず全部後回しにして、最近医者として有名となりつつある永遠亭へと運んでもらうことにしたのだった。

第02話

永遠亭ではその日、良くも悪くもいつも通りの一日を過ごしていた。

ほどほどに患者がやって来て、輝夜が暇をもてあましつつ優曇華の手入れをし、永琳が治療や薬の研究をし、鈴仙はてめに騙されていた。

そんな日常は大きな気配が近づいてくることで崩れ去った。とは言っても、妖怪兔には感じとれず、輝夜と永琳は動じない。てゐはさすが年の功と言うべきか、自身の力は弱いにもかかわらず感じとってはいたが騒ぐことはしなかった。

つまり鈴仙が怯えてさらにてゐの罠にはまったただけだったのだが。

背負った萃香の案内のおかげか迷いの竹林を普通に通過し、その男はやって来た。妖怪兔に永遠亭の中を案内され、永琳の研究室兼診療所に男と永琳と萃香が集まり、萃香の治療をしている。

「鬼の四天王たるあなたがこんなに手酷くやられるなんてね。一体何があつたのかしら？」

永琳の問いに萃香は気まぐげに答える。

「いやあ、ただちよつと闘っただけだよ…」

「闘ったって…スペルカードルールでここまで傷付くわけないですよ。まさかうちの姫達みたいに殺しあつたわけでもあるまいし」

「いやちよつと殴り合いをね…」

それを聞いて思わず呆れる永琳。もっとも、その呆れはスペルカードルールを使わずに殴り合ったことと、鬼を殴り合いでここまで追い詰めた見知らぬ男についてが半々であったが。

「さて、これで治療はおしまい。あなたは妖怪だし、明日には完治するでしょうね。それまでは安静にして寝てなさい。もちろんお酒は禁止よ」

禁酒と聞いて傷付いていた時よりも青ざめる萃香。そんな彼女を見て永琳はますます呆れてしまう。しかしそちらはほうっておくことにし、もう一人に水を向ける。

「さて、そろそろあなたについて聞かせてもらってもいいかしら？あなたの力、今朝感じたものと同じね。一体何者なの？」

「お、私も聞きたいねえ。その馬鹿馬鹿しいまでの妖力にあの私以上の膂力。一体何者なんだい？」

「…待ちなさい。あなた何も知らずに闘っていたの？そもそも何故闘ったのかしら？」

「そりゃあ永琳。そんなのこいつが強そうだったからに決まってるじゃないか。それ以上も以下もないよ。まだ名前も知らないね」

もはや永琳は今の自分の感情を何と呼べばいいのかわからなかった。

と、そこに鈴のような声が響く。長く艶やかな黒髪をなびかせる、絶世と呼ぶに相応しい美少女。輝夜である。

「私も知りたいわ。強くてカッコいいなんて素敵ね。あなたの事教えて？」

今まで治療中と言うことで静かにしつつ、周りを興味深げに見回していた男が答える。

「こんな美少女に興味をもってもらえるなんて光栄だな。
俺の名はシン。大昔の妖怪だ。しばらく自分で自分を封印してたがな」

その後残りの者達も名乗り終え、再び質問はシンに向けられる。

「それで、あなたほどの力を持つ妖怪なんて聞いたことないわ。それに自分を封印したって、一体何故？」

「まあ確かに俺は一人一種族の妖怪だし、知らないのも無理はねえよ。名が広まってないことにも心当たりはあるしな。自分で封印したことについては、ちょっとほとぼりが冷めるまで隠れようと思っ
てな。」

それより俺も色々と聞きたい事があるんだがな。元々そういう約束で萃香と闘ったわけだし」

三人ともまだまだ聞きたい事は山ほどあったが、シンの様子からあまり話すつもりが無いことを悟ると、追々聞いていけばいいと納

得し、質問に答えることにする。

「ああ、そういう約束だったね。約束通り、何でも聞いてくれよ」

「じゃあまず、此処の今の地名からだな。おおまかにでいいから周辺の事も合わせて教えてくれ」

シンの微妙にピントのずれた質問に三人は顔を見合わせる。代表として答えるのは萃香だ。

「此処は幻想郷と呼ばれる場所だよ。人々から忘れ去られた幻想の集まる場所。外にデカイ結界があるのがわかるかい？その中で人や人外が共存してるのさ。察するに、あんたは幻想郷が出来る前から封印されてたみたいだね？」

「…ふむ。…質問についてはその通りだ。俺が封印される時には幻想郷なんて無かった。

思ってたより状況が変わってるみたいだな。妖怪が人間から忘れ去られるか…

まあそれはいい。さっき言ってたスペルカードルールってのは？」

「…結構重要な事を軽く流すね。おおらかとか何というか…」

スペルカードルールってのは、一言で言えば決闘方式だね。幻想郷には人里では人を襲ってはならないというルールがある。そのため妖怪の力が低下しちまってね。その解決のためのルールなんだ。

人間にとっては妖怪相手に勝つ事が出来て、妖怪にとっては人間を食わずに力を維持出来るシステムってわけさ」

「ほっ」

「まず始める前に互いに使用するスペルカードの枚数を決める。そして弾幕やスペルを使いつつ相手に被弾させた方の勝ち。スペルってというのは、まあ必殺技の事だ。詳しい原理は省くけど、使う前に使用を宣言する必要がある。」

「ただしそれだけじゃつまらないからね。そこに美しさを求めるのが粹な闘い方ってわけさ」

「なるほど…奥が深いな。それにしても、そんな決闘法が成り立つとは、随分余裕があるんだな」

意識すると「まるで子供の遊びの様だ」である。それを察して三人は苦笑し、輝夜が答える。

「確かにそう思うのも無理はないけれど、それでうまく回ってるんだし別にいいんじゃないかしら。」

「それに余裕があるのは事実よ。みんながのんびりと暮らしていい。それが幻想郷だもの」

「…確かに平和に暮らしていけるのなら御の字か。すまない。野暮なことを言ってしまったようだ」

「気にする事はないわ。」

「それよりも、長い間封印されていたのだし、何のあてもないのでしよう？もし良かったら暫く此処に住んでみない？」

「あなたが何をしてきたのかもつと知りたいし、今の常識とか、色々教えてあげるわよ？」

輝夜がそう言いだす事はなんとなく予想していたが、永琳はわず

かに驚く。暇を潰したいということもあるだろうが、それ以上に輝夜の瞳に映る強い興味を見てとったからだ。

長年輝夜に仕えてきたからこそ、彼女があまり執着しない性質だというのはよくわかつている。今まであらゆる物に興味を示さなかったあの輝夜が…これはもしかしたら遅すぎる春が来たのかしら、と考えていると

「それは助かるな。是非ともお願いしたい」

こうしてシンの永遠亭の滞在が決まり、しばらくの間鈴仙は胃薬を服用することになった。

第03話

シンが永遠亭に滞在して一週間ほど経過した。

その間、輝夜はほとんどの時間を彼と過ごし、永琳は密かに喜んでいただけだが、それについて語るのは別の機会に譲ろう。

さらに鈴仙は胃薬を服用しなくなったがその経緯についても今回は割愛する。

輝夜はシンに約束通り今の常識などを教えていたのだが、彼は非常に優秀な生徒であった。現代の事などほとんど知らないにも関わらず、いや、だからこそか、彼は真綿に水を染み込ませるかのよう知識を吸収していった。

もちろんそれには教える側であった輝夜が優秀だった事も大きく影響しているだろう。彼女はかつて意欲こそなかったが、永琳をして才能があると言わしめたほどの才女だったのだから。

知識の吸収には問題はなかった。彼が苦戦したのは意外にもスペルカードルールについてだった。

スペルカードは幻想郷におけるもっともポピュラーな決闘法だ。輝夜が教えるのも当然と言えた。

しかし彼にとって問題だったのは、攻撃に美しさを求めるといっ点だった。

ただ勝つだけならば何の問題もなかっただろう。萃香に反応すらさせない機動力に、長年培ってきた経験による回避力。さらには他の追々を許さぬ圧倒的な妖力量による、厚く、速く、強力な弾幕。彼が負ける道理はなかった。

しかし重ねていうが、彼を悩ませたのは美しさである。彼にとって、（いや、世間一般にとっても）闘いとは勝利の為に効率化するものであり、美しさなどはむしろ排除の対象である。

明らかに幻想郷における決闘は異質であり、それは彼にとって大きな枷となっていた。

（まあでも、ただ勝つだけじゃあつまらなかったのも事実だ。これを機に粹な妖怪にでもなつてやろうじゃないか）

しかし存外、彼はその枷を好ましく思っているようだったが。

その日もシンと輝夜は弾幕ごっこをしていた。彼女の完成された弾幕を見て、シンが感嘆し、輝夜を照れさせるという場面もあったがそれはおいておく。

「あやややや。間近で見るととんでもない妖力ですね。一体何を食べたらそんなになるんでしょう」

そこに現れたのは黒髪ショートの快活な美少女。

「あら、ゴシップ好きのブン屋じゃないの。一体何をしにきたのかしら？まあ聞くまでもないけれど」

「ゴシップ好きとは非道いですね輝夜さん。この清く正しい射命丸。嘘を報道したことなど一度たりともありませんよ。神に誓って！」

「妖怪が神に誓ってなんになるっていうのよ…まあいいわ。シン、少し休憩にしましょうか」

それを聞いて文は喜ぶ。

「それがいいですよ！

おっと申し遅れました。わたくし清く正しくがモットーの幻想郷最速のブン屋。射命丸文と申します。本日はあなたに取材をさせていただきます！と思っと思ってやって参りました！」

「よお。初めまして。俺はシン、大昔の妖怪さ。

しかし取材ねえ。もしかして、文々。新聞ってのはアンタが書いてるのかい？」

「ええ！読んで下さってるようで嬉しいです！感想はいかがでしたか？輝夜さんもなんだか言っって愛読してるんですよ！ちなみにこういうのは外じゃツンデレというそうです！」

「余計な事を言わないで頂戴。ただの暇潰しよ」

「ははは、面白いお嬢さんだ。新聞なら俺も楽しく読ませてもらうよ」

それを聞き文は向日葵のような笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます！」

本当はもっと早く取材に来たかったのですが、ちょっと今妖怪の山がゴタゴタしてましてね。こんなに遅れてしまいました」

「あら、何があったの？あなたが記事にしないなんて珍しいことも

あるのね。明日は槍でも降ってくるのかしら」

「それはさすがに非道すぎませんか…なかなかデリケートな問題だったのですよ。」

妖怪の山の天辺に神社が幻想入りしてきたんです。

まあ、既に博麗の巫女が動いたようですし、すぐに解決するでしょう」

輝夜と文。暇を嫌う者同士、結構気が合うようだ。楽しそうな様子から、日常的に憎まれ口をきいている事が伺える。

しかし彼女らは、お喋りに夢中でシンが小さく、へえ…と呟いた事には気が付かなかった。

「おっと、話が逸れてしまいましたね。それでシンさん。早速取材を始めてもよろしいですか？」

「俺が取材されることは既に決定されてるんだな…まあいいけどよ。何でも聞いてくれ。答えたくない事には答えないがな」

「あやや…まあいいでしょう。では……………」

と、取材を進めていく文。

驚く事にこの妖怪、どうやら神話の時代から生きているようだ。自分が知らないのも無理はない。

ひょっとして神話時代の妖怪はみんながこんなに強いのか、と考えるも、そんな事があつたら今の勢力図はこんなものではないだろう、と打ち消す。

シンの答え方はお世辞にも丁寧とは言い難く、そこにこころ一週間

ほどで彼の事をより深く聞いていた輝夜が補足していた。

輝夜としては無意識に彼の事を正しく伝えてもらいたいと思っているのだらう、そんな彼女を見て文はまるで夫婦のようだと思心ほくそ笑む。

先ほど槍が降るだのと言ってくれた意趣返しのネタに使ってやるう。

しかしそんな文の企みは闖入者の存在によって潰える。

「なんだなんだ。ニート姫が外にいるなんて珍しいな。」

どうやらケガ人を案内してきたらしい、輝夜より更に長い白髪をもつ赤眼の美少女、藤原妹紅だ。

いつもならばこのまま殺し合いに突入するのだが、今日は隣にいる男の方に興味を奪われたようだった。

「はじめまして、カッコいいお兄さん。デタラメな妖力してんな」

明け透けながらも微妙に輝夜と似通った挨拶を聞いて、似た者同士なのかと考えるシン。本人達が聞いたら怒り狂って否定するだらうが、彼は将来、この考えを深めていくことになる。

「ちょっと焼き鳥。誰がニートよ！」

いつも通りの悪口。しかし妹紅は、輝夜の怒りがいつもと質の違う事に敏感に気付く。

原因を考えるもいつもと違う所は二つ。文とこの男の存在だ。

もはや考えるまでもない。この男の前で馬鹿にされるのが嫌なのか、この男にちょっとかいをかけられるのが嫌なのか、はたまた両方

か。

どちらにせよこの二トは彼の事がえらく気に入っているようだ。その事に気が付き妹紅は自身が僅かに苛立ったことを自覚する。しかしその理由を深く追及することはせず、妹紅は苛立ちをそのままぶつける事にする。

「お前以外に誰がいるんだよ。この自墮落姫！」

「言ったわね。この白髪女！今さら健康に気を使ったって髪の色は戻らないわよ！」

「んだとお…！」

ヒートアップしていく二人。すわこのまま殺し合いに突入するかと思いきや、それを止めたのは文だった。

「まあまあまあ。お二人とも落ち着いて下さい。シンさんがついていけてませんよ」

引き合いに出され苦笑するシン。いきなり険悪になった二人に啞然としていたのは事実だが、文の目はこれを止めてくれと言っていた。

「射命丸の言う通りだ。少し落ち着いてくれ。二人はいつもこんな感じなのか？」

質問しつつ思い出す言葉は同族嫌悪。そしてこんな空気をなんとかしたい文はおどけて言う。しかし明らかに失言であった。

「ええ。お二人は不老不死なわけですから。顔を合わす度に殺し合

いをしているそうですよ。

嫌よ嫌よもなんとやら、ですかね」

その言葉に二人の怒りの矛先は文に向く。美少女二人に睨み付けられるとなんとも迫力がある。怯んだ文はまたしてもシンを頼る事にした。

「シンさん。か弱い鴉天狗を助けて下さいよう」

シンの背後に隠れる文。美少女に背中にくつつかれ、彼は明らかに気をよくしていた。どうやら女好きらしい。

しかしそんな様子はヒートアップしていた二人の琴線に触れてしまったようだ。今度は怒りの矛先がシンへと向かう。

「ちょっとシン！何そんな女にデレデレしてんのよ！」

「人の前でイチャイチャしゃがって…！」

言い掛かりではあるがデレデレした自覚があるので強く言い返せない。

そこに文は言う。

「こうなったら弾幕ごっこで決着をつけるしかありませんね！シンさん。私の為に二対一で頑張って下さいね！」

満開の笑顔で言う文に、どうにも憎めないなあと思いつつ。もはや正常な思考をしていない二人はそんな様子にますます怒りを募らせ、弾幕ごっこを行うことを決定した。

文の一人勝ちである。

どうしてこうなったと思わなくもないが、練習の成果を試すには丁度いい。密かに考えていたスペルも試してみようと考えつつ、上空に上がる。

文はそんな様子を見ながらカメラの用意をしていた。本当にちゃっかりしている娘である。

(シンさんの勇姿は私がしっかりと写真に納めますから、安心して下さいね！)

一体何を安心しろというのか、本人が聞いたら呆れるであろうことを考えながらも、文の心中は期待で溢れていた。

神話時代の、大妖怪と言うも生温い力を持つシン。力を至上とする妖怪にとって、彼に憧れるのは無理からぬ事であった。封印が解けてわずかに一週間。スペルカードルールについて決して順応しているとは言えないだろうが、それでも彼なら、と期待していた。

会ってから一日も経っていないが、彼の包み込むような力は文に安心感すら与えていたのだ。

弱者が強者に勝てるのがスペルカードルール。しかしそれは決して弱者が有利と言うわけではない。強者には強者のアドバンテージがあり、その差は決して覆る事はない。

そしてそんな文の期待を、シンはこの上ない形で叶えてくれた。

弾幕ごっこの開始と共に輝夜と妹紅が弾幕を放つ。出し惜しみなどない、己の出しうる最高の弾幕。長年殺し合いをし続けた二人だからこそ、互いの呼吸は知り尽くしていた。

息をもつかせぬ弾幕の嵐。それはかの博麗の巫女ですら回避できるかどうか。その上それは当然の如く美しさを兼ね揃えていた。

離れて見ていた文も感嘆の息をもらしつつ、その手はとどまることなくシャッターをきり続ける。

そんな弾幕はしかし、シンに触れる事はない。弾幕の速度や角度を一瞬で見切ると、無駄のない必要最低限の動きで回避する。

まるで弾幕の方から避けていくような錯覚すら感じる。本当に当てる気はあるのか。地球と月が決してぶつかることのないのと同じレベルで、弾幕は彼に当たることはない。それはまるで絶対の真理のよう。

少なくともこの場にいる彼以外の三人はそう感じていた。

攻めているはずの二人が追い詰められた表情になっていく。

輝夜とシンの練習は、彼の張る弾幕についてが主であった。故に輝夜もその回避力に驚嘆する。決してなめていたわけではない。彼ほどの力を持つ大妖を相手にどうして侮ることなど出来よう。

それ故の全力。しかし二人がかりの全力だからこそ、それで仕留められない事実には歯噛みする。

相対してわかる絶対的な彼我の差。しかし認められない。それを覆すのがスペルカードルールなのだから。

輝夜と妹紅は同時にスペルを宣言する。

新難題「金閣寺の一枚天井」

蓬萊「凱風快晴　・フジヤマヴォルケイノ」

発動するスペル。それまでの弾幕が途切れ、滞空するシンに向かって二つの暴虐の嵐が蹂躪せんと迫る。

しかし彼もいつまでも回避に甘んじているわけではない。弾幕の途切れた僅かな隙を百戦錬磨たる彼が見逃すはずもなく。

膨れ上がる妖力。そして一瞬で空を覆う弾幕。二人のスペルはデタラメな妖力を込められた弾幕に消されていく。拮抗すら許さぬ一方的な蹂躪。ただの一手で攻守は入れ替わり、二人は回避を余儀なくされる。

先ほどの二人の弾幕に比べれば美しさは数段劣る。しかし彼の弾幕には観るものを魅了する十二カがあつた。それは圧倒的な力が、それ以外の何かか。

文には分からない。しかし胸から込み上げるこの感動を世界中に伝えたかった。ひたすら魅入る。と、シャッターをきる事も忘れていた己に気が付き慌ててカメラを構える。

そして弾幕ごっこは終盤へと突入する。

試作「雷帝の蹂躪」

スペルの発動と共にシンの体がほのかに発光する。二人は警戒するも、気付いた時には彼を見失っていた。背後に感じる彼の妖力。

馬鹿な。有り得ない。空中戦というのは広大な範囲をフィールドとする。加えて双方遠距離攻撃を主体とする弾幕ごっこにおいての距離がどれほどか。

その距離を一瞬で詰めたというのか。一切知覚させることすらなく。

彼の宣言した雷帝という言葉の意味を理解する。そしてその時にやっと、自分達の周囲に雷で出来た球が無数に存在することに気が付く。

二人の意識があつたのはここまでだった。

離れて見ていた文には状況がよくわかっていた。シンはスペルの宣言の後、文字通り雷速で二人の周囲を駆け巡り、雷球を設置していったのだ。

彼の通った軌跡が淡く発光していなかったら、文にも知覚出来なかったに違いない。

そして知覚すると同時、ほとんど無意識の内にシャッターをきっていた。それはかろうじて二人に襲い掛かる雷を写していたのだが、文にはそのことは意識になく。

ただ呆然としていた。

やがて二人を抱き抱えるシンが近付いてきてようやく我を取り戻す。

「…すごい。…凄い凄い凄い！凄いですよシンさん！」

興奮して抱き着いてくる文。

「落ち着け射命丸。抱き着くのは嬉しいが、二人を下ろしてからにしてくれ」

ピントのずれた宥め方をするシン。

そんな彼に対し、

「射命丸だなんて他人行儀な！文と呼んで下さい！」

やはりピントのずれた返しをする文。こんなやり取りが騒ぎを聞きつけた永琳や鈴仙が来るまで続くのだった。

第04話

「まさか輝夜と妹紅さんの二人がかりで勝てないなんてね」

弾幕ごっこが終わった日の夕食の席での事だ。

「うー…言わないでよ永琳…」

こちらはすっかりいじけてしまった輝夜だ。意識が戻った後、負けたのが悔しいやら、闘う理由を思い出して恥ずかしいやらで小さくなっている。

嫉妬。そう、彼女は自分が文に嫉妬して弾幕ごっこを挑んだ事に今さらながら気付いていた。こんな事は今までなかった。彼女にとって男性というのは自分に言い寄ってくるモノであって、それをあしらう以上の対処をした事がなかったからだ。間違っても嫉妬などしたことがない。だというのに、彼に密着した文を見たたん、冷静さなど吹き飛んでしまった。

この一週間ふわふわとした気持ちでいたが、ようやくその理由に思い至った。自分ではそんなつもりはなかったが、私の中の彼の存在は私が思っている以上に大きくなってきているようだ。

一度自覚してしまうともうダメだ。彼の顔がまともに見られない。長年生きてきて初めての感覚に彼女は戸惑っていた。

「でも本当に凄いですよね。シンさん」

鈴仙が姫をたてるのも忘れ尊敬の眼差しを向ける。

初対面の時との態度の違いに苦笑しつつ、彼は答える。

「いや、俺としてはまだまだだな。輝夜や妹紅の弾幕は素晴らしく美しかった。あれに比べれば研鑽の余地が多分に残ってるさ」

「完膚なきまでに負かしておいてよく言うね。謙遜もいきすぎると嫌味だよ」

てゐが鈴仙のおかずを食べながら言う。
それを見て忍び笑いをしつつ、永琳が思い出したように言った。

「ああ、そういえば今度博麗神社で宴会をするそうよ。妖怪の山のゴタゴタが片付いた記念に。射命丸さんもそれに合わせて記事を書くって張り切ってたわ」

「お、いいな。宴会なんて久しぶりだ」

シンは子供の様に笑う。それを見て頬を緩ませる四人。
こうして永遠亭の一日は過ぎていった。

そしてやってくる宴会当日

酒宴は大いに盛り上がり、飲めや歌えやの大騒ぎとなっていた。肝心の守矢神社の面々がまだ来ていないにも関わらず宴会を始めてしまっている辺り、理由などどうでもいいのだろう。そもそも宴会

の開始時間を決めてすらいなかった。

幻想郷の住人の気質がよく表れていると言える。

そこに文が文文。新聞の号外を配っている。珍しくちゃんと読まれているようだ。注目は当然シンに集まる。

宴会に集まる面々は総じて力の強い者が多く、彼の力を感じ取っている。ただその力を警戒するでもなく興味深げに見ている事からやはり幻想郷の住人はおおらかと言うかなんと言うか。

どうやら今は話しかけるタイミングを計っているようだが。

その彼はと言うと、久しぶりの宴会ということで、存分に楽しんでいた。

「シンさん！飲んでますか！？さっきから全然減ってませんよ！私の酒が飲めないって言うんですか！？」

「落ち着け鈴仙。ちゃんと飲んでるよ…」

楽しんでいた…？

鈴仙は普段宴会の席でもあまり羽目を外し過ぎる事はない。本来の性格や、姫や師匠に遠慮している部分もある。ところが最近、いかなる心境の変化か、少しずつ明るくなってきたとは永琳の談。それを嬉しく思っている彼女もさすがにこれには苦笑いだ。

「うどんげ。あなた少し飲み過ぎよ？何かつまんでらっしゃい」

「師匠…分かりました。行くわよ！てゐ！」

「ハイハイわかったよつと」

どうやら酒が入っても永琳には頭が上がりないらしい。逆にてみには随分高圧的になるようだ。普段のストレスを推して知るべきである。

そして輝夜はと言うと、永琳の隣でシンをチラチラと見ていた。それなりに酒も入っているようで、ほんのり頬が赤らんでいる。それが少女と大人の女性との間のなんとも言えない色香を醸し出しているのだが、肝心のシンはと言うと、やっと鈴仙から解放されてそれどころではないようだ。

「ふー…まさか鈴仙が絡み酒だったとはな」

「お疲れ様。でも私もあんなあの子は初めて見たわ。普段はあんなに飲まないのよ」

「そうかい。ま、うまい酒を飲むのは良いことだしな。呑まれるのは勘弁してもらいたい所だが」

二人の笑い声が響く。ひとしきり笑うと、永琳が言う。

「あなたも少し他の所へ行ってみたら？幻想郷には面白い人が多いわよ」

「そうだな。適当にぶらついてみるよ」

去っていくシン。その後ろ姿を名残惜しげに見つめる輝夜。

「気になるならついて行ったら？邪険にされることは無いでしょう」

「うー…永琳の意地悪…」

まだそんな度胸は無いようだ。輝夜は軽く睨むも永琳はどこ吹く風。別にシンの事を認めていないわけではないが、長年仕えてきた身だ。彼女の変化には喜んでいるが、そう簡単に渡すつもりも無いらしい。あるいは彼女も酔っているのか。

そして宴会はまだまだ始まったばかり…

「はじめまして、シンさん？わたくし八雲紫と申します」

ぶらついているシンに話しかける白と紫を基調とした変わった衣装を身に纏う金髪美女。口元を隠す扇子がなんとも良く似合っている。

「顔を合わせるのは初めてだな。一応名乗り直すが、シンだ。宜しく頼むぜ」

僅かに驚く紫。しかしすぐに嬉しそうな表情に変わる。

「バレていましたか。謝罪いたしますわ。さすがは神話を生き抜いた大妖怪。その妖力は伊達では有りませんわね」

「気にすんな。別に害意は無かったし俺も気にしちゃいねえよ。あまり良い趣味とは言えないがな。それよりその胡散臭い喋り方の方を何とかしてくれねえか？背中がムズムズするんだが」

「あら、胡散臭いとは失礼ね。レディに対する気遣いが足りないのではなくて?」

「おっと、こいつは失礼。ここ最近何度かこつちを覗いていた事と相子にしてくれよ」

どうやらこちらの非を完全に水に流すためにわざと憎まれ口を叩いたようだ。ここ数日で観察した彼の人柄といい、覗いていたことを流す度量といい、非常に好ましい。

「あなたとは仲良くなれそうだね。宜しくして頂戴ね?」

「ああ。まずは酒でも酌み交わすでしょうぜ」

笑顔で互いの杯に注いでいく二人。と、そこに柔らかな女性の声が響く。

「紫ばかりズルいわ。私も混ぜて頂戴よ。」

はじめましてシンさん。わたくし西行寺幽々子と申します。私とも是非仲良くしてもらいたいわ」

淡いブルーの衣装に身を包む、ピンクの髪をした美女。声同様柔らかな印象を与え、なんとも包容力を感じさせる。側には緑を印象付ける服を着た銀髪おかつぱの美少女。此方は少し緊張しているようだ。

「よお、はじめまして。シンだ。此方こそ宜しく。そっちの可愛らしいお嬢さんも宜しく頼むぜ」

「か、可愛らしいだなんて…此方こそ宜しく願います！魂魄妖夢と申します！」

緊張は少し解れたか。しかし照れつつも強者に対する畏敬を感じさせる振る舞い。両手に抱える刀と言い、武士道を感じさせる。

新たに二人を加え、四人で酒を酌み交わす。

話題はそれぞれの事についてだ。

「幻想郷の管理者に冥界の管理者か。なんとも立派なもんだな。妖夢も年の割に随分動きが洗練されていて隙がない。大したもんだ」

照れる妖夢は何も言わず、答えるのは紫だ。

「そんなに大層なものではないわ。私なんて幻想郷の雑用係みたいなものよ。好きでやってるし構わないけどね」

「あら、紫はキチンと仕事をしていたのね。ごめんなさい。私はてつきり式に押し付けて自分は寝ているものだと思っていたわ」

言い返せない。旗色の悪くなってきた紫は話題転換を試みる。かなり強引ではあったがそれを指摘する野暮な人（？）はいなかった。

「それよりあなたの方がよっぽど凄いわ。私たちが足元にも及ばないその妖力、神話の時代から生き残っているのも納得ね」

「それこそそんな大層な事じゃねえさ。いくら力が有ったって出来ない事の方が多い」

さらりと言うが、神々が隆盛を誇る神話時代。生半可な事では生き残れないだろう。もちろん因幡の素兔のような例もあるが。しか

し彼が激動の生を歩んで来たであろう事は何より彼の力が雄弁に物語っている。一見隙だらけだがその実、何か事が起こった場合彼が最も早く行動を起こすであろうことは想像に難くない。彼を見て妖力だけの愚者と侮るものなどないだろう。

そこには確かな経験に裏打ちされた自信があった。

しかし此処は酒の席。いつまでも一つの話題に留まるはずも無くいつの間にか自身のお気に入りの話となっていた。

「この博麗神社の今代の巫女が霊夢というんだけどね。才能は歴代最高なのに、まるでやる気がなくて困っちゃうのよ」

グチの体を装ってはいるが、その口ぶりは明らかに霊夢の事が可愛くて仕方ない様子だ。暗に霊夢を誉める紫に、幽々子も負けてはられないとばかりに口を開く。

「あら。確かに霊夢の才は万人が認める所だけど、うちの妖夢だって決して負けてはいないわ。今でこそ半人前だけど、堅実な努力はいずれ才能を凌駕するのよ」

「勿論妖夢にも才はあるし、その努力は確実に実を結ぶでしょう。しかし霊夢の天才はそんなものとは次元が異なるわ。真の天才とはあらゆる努力を寄せ付けないのよ」

笑顔のままプレッシャーを高めていく二人。

しかしこの場にいる妖夢は堪ったものでは無い。せめてそういう話は本人のいない所でやって欲しかった。そさくさと霊夢達の所へ逃げる。

そしてシンが口を挟む。

「二人の言い分はどちらも間違っちゃいないがな。どちらがより正しいかなんて決めようが無いだろう」

「確かにそうね。…そうだ、今暖めている計画が一つあるの」

紫が何か企んでいる笑みを浮かべて言う。それに答える幽々子も楽しげだ。

「あら、興味深いわね。このタイミングで言うという事は、それなりに関係があるのでしょよね？」

「ええ。けれど別に難しい事は無いわ。月にあるという大層貴重なお酒。それを霊夢と妖夢、どちらが取ってこれるかでひとまずの優劣を決めましょう」

「そいつは面白そうだ。俺も月の文化ってやつに興味があるし、一枚噛ませてもらうぜ」

こうして、後の月に一波乱起こる事が酔っぱらい達によって決定されていくのだった。

宴もたけなわ。しかし忘れてはならない。この宴の主演は本来守矢の面々である事を。

その守矢陣はと言うと

「何だこの状況は…」

博麗神社についてみれば死屍累々。酒瓶は転がり、料理は食い散らかされ、泥酔している者までいる。どう見ても一、二時間で陥る状況では無い。

宴会と聞いて当然夜だと思い、一応自分達は新参者だし早めに出ようと夕方に着いたらこの始末。もはや笑うしかなかった。

「やはりこの幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね……」

純粹だった少女はまた一つ現実を知り大人へとなっていく。それが幸せな事かは本人にしか分からない。

イイハナシダナー……？

「いやいやいや！本当にこれで終わりなの！？私達の出番これだけ！？

幻想郷に来たら何か懐かしい妖力とか感じるし、今日はシリアス路線で行こうと思ってたんだけど！」

ガンキャノンが何か言ってる。

衣玖「空気読んで下さい神奈子さん」

お前の出番はまだまだ先だ。

シンが幻想郷に来て初めての宴会は、こうして混沌の内に幕を降ろしたのだった。

第04話（後書き）

次回から各キャラの閑話を挟んで儂月抄の皮を被ったナニカ編に入ります。

ただ書き溜めが早くもなくなってきたため更新速度は落ちると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4501z/>

東方雷帝録

2011年12月18日00時50分発行